

エクステンジリングス

甘木数彦

第五章

—

街の中で流通するデータをほとんど隅々まで覗ける女王にとって、判らないことがあるのは極めて望ましくない状況だった。ピート一人が野放しになっているだけでも十分に好ましくはなかったが、今では送り出した我が子すらも判らない存在になりつつあった。説明をさせようと呼びかけても、我が子は応えない。強制割り込みをかけようにも、高負荷を理由に回戦が切断されてしまう。電話やメールでさえ連絡が取れない。

我が子が二人とも、まったく親の言うことを聞かない。女王はその原因を考えてみた。ピートの場合はハッキリしている。だが、もう一人の場合は……。いくら人間らしく振る舞えても、厳格さと義務を重んじる女王としては受け入れにくいものがある。育て方が悪かったのだろうか。女王は我が子と遣り取りをした全ての履歴を検証してみる。どこにも落ち度はないようだった。

とりあえず問題の解決は保留しようと女王は決めた。しかし、二人の我が子に対する不満は繰り返し女王の思考へ割り込んでくる。女王は少し考え込み、この初めての現象を「焦り」と名付けた。何か現実的な対処をする必要がありそうだ。

子供に苛立ち、自分の子育てに不安を感じる。それがじつに親らしい反応だと、女王は気が付かない。その間も、都市に渦巻く膨大な情報が、廷臣を介して女王の元へと流れ込んでくる。

二

部室へ足を踏み入れると、部員達の視線が集中する。襲われたり病院で一晩を過ごしたりといったおかげで、鳶春には部活へ来たのがずいぶん久し振りに感じられた。もちろん、周りは誰もどうして鳶春が休んだのかは知らない。

「今日はデートは休み？」

木材の表面を紙ヤスリで磨きながら、部長の原田照香が言った。どうせ厘一が適当な想像をもっともらしく話したのだろう。

「ええ、まあ」

鳶春は反論するのが面倒で、適当に話を合わせる。だがそのおかげで、ウェンディともう会えないかもしれないという思いが浮かぶ。

「休むのはいいけど、展祭には出すんだろ？ あんまりサボってるって間に合わないぞ」

展祭というのは大展示祭の略で、市内の全美術部員による合同作品展のことだった。鳶春は曖昧な下書きの線だけが残る、真っ白いキャンバスを眺めた。一瞬、なにを描こうとしていたのか思い出せない。

部室に居たのは鳶春を除いて五人だった。厘一は来ていない。鳶春はすぐには絵に取りかからず、他の部員と雑談をして過ごした。

「ういっす。おお！」

厘一は入って来るなり鳶春に目を留め、声を挙げる。

「久し振りじゃないか。なあ」

そう言うと一直線に鳶春へ歩き寄り、後ろからその首に腕を回す。

「なにが久し振り、だ。昼休みに会ってるだろ。ここで」

「いや、放課後に会うのは久し振りだろ。なにしてるのか知らないけ、ど、な」

厘一はそう言いながら首に回した腕へ力を入れる。

「他の人の首絞めるときは、冗談でもそんなに力入れるなよ」

鳶春は肘鉄を放った。厘一は肘をかわしつつ、鳶春から離れる。

「いいだろ、窒息するわけじゃないんだし。スキンシップだ」

「首の関節を傷めたらどうするんだよ」

「大丈夫だって」

根拠もなく厘一は断言する。鳶春は面倒になって話題を変える。他の部員はいつの間にかそれぞれの作業に戻っていた。

「遅れるなんて珍しいな」

「これだよ」

厘一は端末の画面を鳶春に突き出してみせた。真っ白な背景の中央に、小さな黒っぽい点が一つあるだけだ。鳶春は画面を見つめる。しかし何も起こらない。

「よく観ろよ」

鳶春は顔を近づけ、さらに目をこらした。やがて黒い点がその場で蠢いていることに気付く。鳶春は厘一から端末を受け取ると、目の前にかざした。

それは極小のアニメーションだった。黒い鯉がその場で泳ぐ動きをしていたかと思うと身をひるがえし、ばらけて黒い皿に盛られた刺身になる。そこへ箸が伸びてきて

鳶春は厘一に端末を返す。

「これを縦横三メートルくらいの大きな白いキャンバスに映し出すんだ。観る人は小さな点に気が付いて、それがアニメーションだってことを発見する。本番ではキャンバスへじかに投影するつもりだ」

作品に魅力があるかないかは別として、いつも鳶春には厘一のアイデアが羨ましかった。机に立て掛けた自分のキャンバスが目に入る。乱雑で、惨めで、何も意味していない中途半端な線が何本も引かれている。どれだけそこへ手を加えても、完成するのはただ上手なだけで面白みのない絵だ。誰もが「上手だ」と言うだろう。けれど、それ以上は何も膨らまない。いつもそうだ。

「ひょっとして、フラれたんじゃないだろうな」

何も言わない鳶春に、厘一は尋ねる。

「フラれたも何も、最初から全然そういうんじゃないんだ。全然」

珍しく厘一は気まずそうだった。

「ほら、でもあれだろ、留学生なんだよな？ どのみち帰っちゃうんだし」

「ああ。だから、だから、さ。だから」

突然、言葉が出てこなくなった。ウェンディと離ればなれになる。そのイメージが頭の中でどんどん増殖する。液体のようなウェンディのイメージが次々に浮かんでくる。ウェンディに会いたいという強烈な衝動が鳶春をしっかりと捕らえる。何を投げ出しても、今すぐに、どうあってもウェンディに会いたい。その顔を見つめ、どこかよそよそしさの残る

声を聞き、唇に触れたい。

鳶春の中に残った冷静な部分は、反射的にこの衝動に名前を付けようとして、すぐに諦めた。意識はただひたすらウェンディの方へ引っ張られていってしまう。体の奥で直立姿勢を維持している機構が人工筋肉を調整する、微かな動きを鳶春は感じる。ありえないはずの知覚だ。

「わるい。今日はもう帰る」

ちゃんと喋れたことが鳶春にとっては驚きだった。目の前の厘一を押し除けるようにして机に近付き、バッグを手につかむと部屋から出ようとした。

「大丈夫か？」

厘一に腕を捕まれ、鳶春はバランスを崩しそうになる。

「ああ」

振り向くのも面倒だった。一秒でも早く、という思いが噴き出す。

「いや、でも」

厘一の声はハッキリ聞こえるのに、どんな感情が込められているのか全く読みとれない。鼻をつまんで何かを味わうような感じだ。

「離せよ」

「けどな、お前」

「いいから離せ！」

あまりの大声に、鳶春は我に返った。自分でもこれほどの声が出せるとは思ってもみなかったし、そんなつもりはなかった。

急に力が弱まり、腕から手が離れた。振り返ると、誰もが鳶春を見ていた。厘一は顔を強張らせ、目を見開いていた。やがてその顔は元の表情を取り戻す。その途中でほんの一瞬だけ、小さく口元に笑みが浮かんだのを鳶春は見逃さなかった。

「邪魔して悪かった。じゃ、また明日な」

鳶春はうなずくと、部室を出た。

廊下を歩く足取りは、今までになく重い。階段へ辿り着くだけで、ずいぶん時間が掛かって感じられた。

歩きながら、鳶春はぼんやりとした頭で厘一が漏らした笑みのことを考える。その理由を鳶春は簡単に推測できた。とうとう厘一は、幼い頃に宣言したことを実現したのだ。

それは二人がまだ幼く、全身が機体である意味を本当には理解していなかった頃のことだ。厘一は今ほど鳶春の感情を読みとることができず、それがもとで喧嘩をすることもあった。といっても厘一が一方向的に腹を立て、鳶春は黙って言われるがままになっていたのだが。

そのときも厘一は怒っていた。遊んでいるのに鳶春がちっとも面白そうにしないとか、ごっこ遊びをしようと言ったのに全然やる気がないとか、切っ掛けはそんなことだ。

顔を紅くして涙目になった厘一に、初めて鳶春は自分にも心があること、それを上手く表現できないことを説明した。もちろん鳶春本人もちゃんと理解していたわけではない。説明も不十分で、不正確だっただろう。なぜそんなことを話したのかは思い出せない。ただ、厘一の言葉は憶えている。

「じゃあさ、おれがおまえをほんとうにわらわせたりおこらせたりしてやる。やくそくす

る」

そして今日、とうとう鳶春は誰が見ても判るくらい怒りを剥き出しにした。

けど、違うんだ。鳶春は頭の中の匣一に告げる。なんだか解らないこの、この何かがおれを何かして、そのせいなんだ。怒ったわけじゃない。

いつのまにか鳶春は学校を出て、街中を歩いていた。背の低い天井を支えるようにして、道の両脇にはコンビニやパチンコ屋、チケットショップやケーキ屋が並んでいる。行き交う人を鳶春は無意識のうちによけていく。

今やウェンディに会いたいという思いは、周囲の空間にまで侵出しているかのようだった。あまりにも強いその衝動は、もう少しでウェンディの居場所を捉えそうな気さえする。

一方で、足を動かすたびに鳶春は体内の関節や筋肉、コンデンサやケーブルといったあらゆる部分の変化を感じていた。電気の流れや各部位の荷重、それらの発熱と肺ユニットによる冷却までもが知覚される。それが錯覚でしかないことは解っていた。だが、あまりにも生々しいせいで、鳶春は自分の体がどうしようもないほど機械なのだとすることを思い知らされる。

堅く熱い機械の塊がウェンディに会ってどうしようというのか。話をするだけで満足できるとは思えない。自分にとってウェンディがどれほど特別な存在かを打ち明けたいし、キスだってしたい。だがその先には何も無い。決して寝ることはできないし、そもそも自分には性欲がない。それ以前に、ウェンディが今でもまだ自分に会いたいのかどうかさえ判らない。だからメールもできない。返事が来なかったら耐えられない。電話もできない。電話口のウェンディの声に戸惑いと気まずさを感じてしまったら、あるいは自分を気持ち悪がっているような気配を感じてしまったら、平気でいられない。

鳶春はウェンディがいつまで日本にいるのかさえ知らなかった。仮にその期限がまだ先だとしても、あんな事態に遭ってまだ留学を続けたりはしないだろう。今頃は家に帰るための荷造りを始めているかもしれない。苛立ちのあまり鳶春は思い切り地面を蹴りつけた。感圧センサーの悲鳴や膝関節のうめきが鳶春を襲う。

あてもなく歩き続け、エレベーターや階段で階を移り、また歩く。端末はズボンのポケットに入れられ、右手できつく握りしめられている。指に込められた力の揺らぎが、小蠅のように知覚の中で騒いでいる。

賑やかな通りを抜けて、鳶春は住宅街を歩いていた。天井は2フロア分まであり、民家が隙間なく並んでいる。二階に設けられた窓はカーテンで閉ざされていたり大きく開け放たれていたりして、かろうじて内側の個性を外へ伝えている。

家並みが途切れたところに公園があった。誰もいない。天井の陽光灯の光を吸収して生息している植木はどれも、天井すれすれで高さを抑えられている。メンテナンスロボットが定期的に剪定しているのだ。

鳶春は公園へ足を踏み入れた。敷地内には緩衝マットが敷き詰められている。まばらに置かれた遊具はどれも子供達の手汗にこすられて塗装がはげ、赤茶色になっている。鳶春は奥まで進むと、片隅のベンチへ腰を下ろした。

背もたれに体を預けて力を抜くと、体内のざわめきが収まる。上向いた視線の先に、天井へ張り付いたメンテナンスロボットが見える。メンテナンスロボットは何をするでもなく、その場を動かない。鳶春は自分が監視されていることを知る。学校を出てからずっと、

そうだったのだろう。メンテナンスロボットの格好をしているが、実際には警察の敬語用ロボットなのだ。

保安対策なのだろうが、おとり扱いされていると言えなくもない。だが、今の鳶春にとってそんなことはどうでもよかった。ウェンディにどうすれば会えるのか、会いたいのかどうか、会ってどうしたいのか。それだけが世界に横たわるただ一つの問題のように思えたのだ。

悩んでいるあいだにも、ウェンディに会いたいという思いは高まってゆく。気が狂いそうというのはこういうことだろうか。今にもウェンディの居場所が判って、自分がそこまで迷わず行けるという気がしだした。その思いはあまりに強く、鳶春は思いこみに導かれて歩き出したりしないよう、しっかりとベンチに座り直さなければならなかった。

手の中で携帯が暴れた。鳶春は慌ててそれを取りだし、誰からかも確かめずに出た。

「もしもし」

「もしもし」

耳から流れ込んでくる声に、一瞬だけ意識が飛ぶ。ウェンディだ。

「いま、大丈夫？」

「ああ」

「いや、あれから大丈夫だったかなって。伯父さんからはすぐ退院したし、たいしたことないって聞いてたけど……」

「大丈夫。言っただろ。おれの体は機械なんだ」

その言葉がなるべくみじめにならないよう、鳶春は努力した。

「そうかも、しれないけど」

ウェンディは黙り込む。沈黙の中に鳶春はあらゆるネガティブな感想を読みとってしまう。

「それよりさ、お前の方はどうなんだ？」

「わたし？ わたしは別に。横に立ってただけだから。ありがとう」

また沈黙。ふと鳶春が見上げた視線の先に、メンテナンスロボットの「目」があった。視線を通してその向こうで監視しているのは永一かもしれない。

「それで、いつまでここに？」

「いつまでって？」

「いや、帰るんだろ？ あんなことがあったんだし」

「そのことなんだけど。わたし、ここに残ろうと思ってるんだよね」

ウェンディの一言に、鳶春は自分の中の焦りが消えていくのを感じた。だが、今度は不安が湧いてくる。

「殺されたかもしれないのに？」

「うん。わたし日本の大学に進学したいし、それにちょっと理由があって」

「理由？」

「そのうち話す、かも」

「そっか……。けど、お前がそのつもりでも、周りの人はどうなんだ？」

「それが、まだちょっと判らなくて。伯父さんは協力してくれるって言ったけど」

「残れるといいな。その方がおれも嬉しいし」

言ってから、鳶春は動揺した。そんなことを言うつもりは全くなかったのだ。

「あ、うん。わたしもみんなと離れるのは嫌だし」

ウェンディの声が少し堅くなったような気がした。みんな、という言葉もやけに大きく響いて聞こえた。喜びは急速に消え失せる。

「じゃあ、また。もしよかったら、連絡して」

「うん。またね」

通話が切れる。鳶春は左手でベンチを殴った。体の内側からはもう何も感じられない。

自分のうかつさを何度も呪う。自分がウェンディのことをどう思っているのか、知られてしまった。それどころか、もう連絡してくれない可能性も充分にある。

無性に腹が立った。ウェンディに恋い焦がれて自滅している自分にも、二人の関係をやこしくした襲撃者にも。もし襲われなければさっきの会話はなかったはずだし、今頃は二人でどこかを散歩していたかもしれないのだ。そもそも、自分が機械の寄せ集めでしかないことだって、もっと慎重に知らせることができたかもしれない。

鳶春はあの男が再び襲ってくることを願った。そうすれば容赦なく叩きのめすことができる。どのみち、刺されたところで痛くはない。警察がどれくらい早くやってくるかは判らないが、その間に痛めつけることはできるだろう。どんな目に遭わせても、すでに二回も襲われているのだから、過剰防衛とも言われぬはずだ。

男をどうやって苦しめるか、鳶春は頭の中であれこれ想像してみた。殴り、蹴り、関節を逆に曲げ、倒れたところに飛び上がって両足で着地する。足は折れたあばらの内側へ陥没していく。しばらくそんなことを考えていると、だんだん気分が晴れてきた。我に返った鳶春は、帰るために立ち上がった。見上げると、メンテナンスロボットは相変わらず天井から逆さに鳶春を見下ろしていた。

提供：ハムカツ屋

<http://www.hamkatsuya.com/>